

正しいテストの作り方～その1

先月1学期の中間(第1回)テストがありました。今月はもう期末(第2回)テストがひかえていますが、ここで「正しい」定期テストの作り方などを述べてみたいと思います。

まずいわゆるテストには大きく分けて2つの種類があります。ひとつは、ある一定の基準点以上を取ることを目的としたもの(例えば自動車免許や塾の計算テストなど)です。これは一定レベル以上の知識や技能が身に付いているかを確認するためのものであり、設問内容も基礎レベルのものを羅列したものになります。従って全員が満点を取ることを期待するものであってよいわけです。

もうひとつは、ある集団に序列をつけることを目的としたもの(入学試験や塾の月例テストなど)です。この種のテストは先のものとは違い、個々が習得した知識や技能の質や量を比較評価するわけですから、設問内容も基礎から応用レベルまで幅広く出題されることになります。従って統計的にいえば、平均点が50点前後で満点や0点が誰もいないことが理想となります。

学校の定期テストは、前者の学習内容の確認の意味もそれなりに含んでいるでしょうが、最終的に通知表の評定につながることを考えると、やはり後者の性格を強く持っていることとなります。よって本来、定期テストは平均点を 60 ± 5 点に設定し、90点以上や20点以下が全体の各数%となるものを目指すべきだと思います。その観点から各中学の定期テストを眺めると、全体に平均点が高く(70点を超え)、80点台や90点台に人数のピークがくるものが多いように思います。つまり基本問題が多すぎて、上位層の差を付ける問題の割合が小さいのです。「みんながよい点が取れて何が悪いのか。」と思われるかも知れませんが、低いハードルばかりを跳んでいると、いくら才能があっても自分自身の記録を伸ばすことはできなくなるものです。

こんな例があります。ある中学の社会では、「このプリントから90点分ですから、しっかり覚えてきなさい。」という指導(?対応)を伝統的に行っているようなのですが、その結果として定期テストの点は悪くないのに、入試や模試になると点が取れないという現象があらわれてきます。なかなか覚えようとしない生徒に、「これだけは覚えて欲しい。」と先生がまとめたプリントは、逆に成績が優秀な生徒をさぼらせることにしかならないのです。

では誰も答えられないような問題を出せばいいのかというと、そうした短絡的なものではありません。生徒の力を正しく判断できる問題を作り出すところに教師としての醍醐味があり、まさに力量が問われるわけです。(次回へ続く)